

# Book Review

## 歯科医師・歯科衛生士のための ペリオの治癒形態と治し方

牧野 明 著



Reviewer

高橋直紀 Naoki Takahashi

(北海道大学大学院歯学研究院・歯周病学教室)

A4 判変, 160 頁  
カラー  
定価 9,350 円  
(本体 8,500 円+税 10%)  
医歯薬出版刊



2013年に刊行され、多くの臨床家に愛読された『歯周基本治療で治る！歯周基本治療で治す！』の後継書ともいえるのが、本書である。前著の実践的なスタイルを継承しつつ、内容・構成の両面においてさらに充実しており、歯周治療に携わるすべての臨床家にとって必読の一冊である。

本書の最大の特徴は、「治癒のかたち（治癒形態）」と「治療の方法（治し方）」を対応させて丁寧に解説されている点にある。治療によってどのような治癒が期待されるかを明確にイメージし、病態をどう「読む」か、どのような処置が必要か、わかりやすく理解できる構成となっている。全編を通じて21例もの豊富な症例が提示され、治癒形態に至る臨床経過を実感できる点も大きな特長である。さらに、病理組織像や図解も多数掲載されており、視覚的理解を深めながら読み進められることも特筆すべき点である。

Chapter 1では、「治癒形態から考

える治し方」をテーマに、プラークコントロールからSRP、歯周外科、再生療法に至るまでのエッセンスが体系的にまとめられている。SRPの限界と精度、歯周外科の適応、自然挺出や再生療法の判断基準などが、実践的な視点から解説されている。「歯肉が乾くのを待つ」「(できれば)1歯につき1回で無浸麻下でのSRP」といった、牧野先生の臨床スタイルも健在である。

Chapter 2では、「ペリオを読む」という視点から、歯周治療における診断力を高めるための観察眼について解説されている。「歯肉を読む」では、浮腫性か線維性か、薄いか厚いか、歯肉退縮のリスク因子など、視診から得られる情報をどう臨床に活かすかが具体的に示されている。「X線写真を読む」では、骨欠損像、歯槽硬線、歯根膜腔、骨梁像、歯槽骨の厚みなどの微細な所見をどのように臨床と結びつけるかが詳細に解説されている。

Chapter 3では、「歯周治療に残された“課題”」として、根分岐部病変

や咬合性外傷といった対応の難しいテーマに焦点が当てられている。上顎の3度根分岐部病変に関しては、著者による「牧野の分類」が紹介されており、治療方針を検討するうえで大いに参考になる。後半では、咬合性外傷が歯周治療の結果に及ぼす影響に着目し、長期経過症例とともに、「力」の評価およびそのコントロール方法が解説されている。

本書全体を通じて、歯科医師のみならず歯科衛生士にとっても有用な内容が随所に盛り込まれており、治療技術だけでなく、診断力・観察力・患者説明力といった“臨床力”全般を高めることが可能である。本書のプロローグにもあるように、歯周外科を行わずに歯周状態が安定するのであれば、それに越したことはない。歯周治療の本質を改めて問い直し、質の高い歯周基本治療を実践したいと願うすべての歯科医師・歯科衛生士にぜひ手に取っていただきたい一冊である。